実習報告 IWK Health Center ――松平 千佳

IWK ヘルスセンターは、カナダのノバスコシアン州全域の高度小児医療をカバーする拠点病院です。私は、この病院で勤める Child Life Specialist のリンダ・スキナーさん（チーム責任者）のもと、10 名から編成されるチャイルドライフ・チームの中に入り 10 日間の研修を行いました。リンダは、Child Life and School Services の総責任者としてこの病院に働く、熟練した技術と知識を持ったあたたかくユーモアあふれる CLS です。

研修を通して、チームで働くという視点の大切さを改めて学びました。チーム医療を行う場合は、それぞれの専門職が自分の仕事に焦点をしっかり当て、専門的な枠組みを明確にすることが大事ですが、同じように他の職種の専門性を尊重しながら、なおかつ人間的なつながりも大事にしなければならない、ということをリンダさんたち CLS の活動から学びました。また、CLS はどうやって専門的な技術を習得するのかという質問に対し、大事なことは①知的に理解し、②観察し、③実践し、④そして振り返ること、この一連の流れの繰り返しであるといわれたことも印象的でした。

リンダさんたちも、やはり Play（遊び）の持つ重要性を強調していました。CLS も Play（遊び）を何よりも大事にしなければならないとリンダはくりかえし話していました。

IWK ヘルスセンターは、1980 年代よりファミリーセンタードケアを病院の中心理念としておき運営されています。この理念を簡単に説明すると、「家族（病児も含む）をケアの重要なパートナーとして位置づけ内包すること」です。家族が大事な治療のパートナーですから、当然ながら家族に面会時間などありません。きょうだいも招かれてプレイルームで遊びます。この家族中心主義の実践については、参考資料を頂いたので、IWK でどのように導入していったのか今後研究し発表できればと考えています。

とても寒いカナダでしたが、リンダのチームは年上の CLS が若い CLS をサポートし、互いを尊重しあい大切にしているあたたかなグループでした。このチームのように専門性が高く、かつ互いを認め合うグループはとてもすばらしい仕事上のパフォーマンスを生み出すに違いない、と思いました。日本でも職種間の違いを認めあいながら、あたたかなチームを作っていくことの重要性をもっと訴えたいと思います。

インフォメーション

第 3 回 HPS Japan 養成講座が始まりました。聴講生も現在募集しております。

養成講座

・第 3 クール　2009 年 2 月 16 日～ 3 月 19 日
　定員：1 クール定員 10 名で 1 クラス

第 4 クールは、2009 年 9 月初旬開講を予定しております。

HPS Japan Hospital Play Specialist

〒422-8021 静岡市駿河区小鹿 2-2-1
静岡県立大学短期大学部　HPS Japan 養成教育事業事務局
tel：054(202)2652　mail：hps-japan@u-shizuoka-ken.ac.jp
担当：松平千佳、江原勝幸、中村仁美

文部科学省社会人の学び直しニーズ対応教育推進プログラム委託事業

HPS Japan Hospital Play Specialist

News Letter（ニュースレター）

http://oshika.u-shizuoka-ken.ac.jp/

2008 Vol.4 Feb.

この人に聞く（インタビュー）

静岡県病院局長　杉山 純 氏

Q 子どもの療養環境の現状や課題は？

これからの医療は、患者さんが自分の医療に対して積極的に関わっていくことが非常に大事です。日頃の治療そのものが患者さんの関わりを引き出し、それで治療効果をあげ、一日も早い社会復帰を果たすことが大きな使命です。従前、病院は的確な時期に、的確に医療を提供することばかりに目がいっていました。療養環境を無視していたわけではないですが、医療提供者側の論理でハードやソフトを整備してきました。今後、主体的な子どもの関与を引き出せる療養環境と適切な医療ケアの提供をどう関係づけ、どう進めてくのかが問われてきます。この変革の中で、HPS プロジェクトは実にタイムリーな事業です。病気の子どもを治療に向き合わせする動機づけについて、医師や看護師などのスキルではどうしても立ち行かないところがあります。医療者とは違った視点から子どもや保護者にアプローチしていく技術や知識は、子どもの療養環境の向上の点からも非常に重要です。

Q 県立３病院の法人化後の療養環境は？

４月から県立子ども病院の保育士募集は常勤採用になります。これまでは人事管理と病院の治療方針や病院理念がマッチしておらず、県の職員採用として制限がありました。職種ごとの定数は基本的になくなり、医療現場のニーズに即して自律的で柔軟な人材確保を進めます。大事なことは、患者さんと医療の関係であり、病院や治療の本来的なあり方を的確に捉え、その実現に向けた人材や組織の整備です。

昨年、県立子ども病院の夜勤体験で、喘息の小さい子が吸引器具を口に当てることを嫌がり、泣いている場面に遭遇しました。この時に、就寝前でも HPS がいればうまく吸引に結び付けられたであろうと思いました。看護師があやしたり、ビデオをみせたりというこれまでの方法ではなく、医療とは違った角度からのアプローチによって、治療を嫌がっている子どもの心理的安心感を与えるだけでなく、治療時間が短縮され、的確な治療が行えるという効果が期待されます。

▶裏面へつづく

この人に聞く インタビュー

静岡県病院局長　杉山 純 氏

Q 医療現場では Play の価値や HPS の理解が進みませんが？

今の医療現場で急激な変化を求めるのも難しいものです。しかし、県立こども病院の看護師から、泣いて検査を拒絶していた子どもを HPS を学んだ保育士が関わり、抱っこしながらスムーズに検査を終えた様子を聞きました。この例のように、しっかりとその成果を目のあたりに見せていくということが非常に大事になります。時間はかかるかもしれませんが、それが一番の近道です。病院ごとの状況が違うので一概には言えませんが、HPS のスキルを持った方が地道に、病院の中で確実にその活動をすることにより、看護師や医師に存在感を示し、結果的には治療が効果的に行えることの理解が徐々に進むはずです。さらに、子どもやご家族の病院や治療への抵抗感が減り、病院を笑顔で出て行ってもらえれば次につながります。よい治療の成果が子どもや保護者からも喜ばれ、医療者の励みにもなり、HPS の活動が確実に根付いていくでしょう。長い目で、子どもの目の輝きや表情を確かめながら、保護者や現場の医療者の声を聞きながら判断していく必要があります。医療現場に実際に行ってみると HPS が活躍する場面がかなりあることを実感します。

Q HPS の活動に期待することは？

委託事業終了後も、積極的・先駆的に取り組んでいるこの取り組みを継続することが大切です。HPS の活動を病院の文化に根付かせていくこと、HPS の関わりの成果を社会的に、医療者に、子どもや保護者の方などに承認されることは 3 年で答えが出るものではありません。個別の具体的な実践の効果が上がっても、5 年、10 年というスパンで土壌をしっかりと固めていく活動に期待しています。社会全体に具体的な HPS の意義や役割を可視化できるかどうか、医療文化の中にそれが示せるかどうかが問われますが、そのための工夫や仕掛けも必要です。

看護師のスペシャリストとジェネラリストの流れのように、HPS も専門性を追求していく方向としっかりと社会的な広がりの中で認知されることを主眼とする二通りがあります。医療現場の専門家集団の中でその存在価値を認知してもらうにはスペシャリストな部分を高めていかなければなりません。国際的な視野で、オピニオンリーダーとして専門集団の地位を医療者に主張できる専門性の追求が欠かせません。しかし、病院のスタッフがその職の第一人者ばかりではなく、ジェネラリストとしてその専門性の底辺部分を支えることも同時に考えなければなりません。HPS の活動にシンパシーを感じる人をいかに増やしていけるのかが大切です。日本の医療現場で HPS は新参者なので、専門職集団としていかに医療者の中に入り、いかに子どもや家族を味方にしていくのか、HPS が病院にいて良かったという社会的な評価を高めていくための取り組みの組織的展開が重要です。

治療は目的ではなく手段ですし、一人でも多くの病気の子どもが家庭、学校、地域、そして病院で自分らしく生きられるかです。そのためにいろいろな人が関わり、みんなが切磋琢磨してやれることを精一杯やっていくことではないでしょうか。一日でも早く退院することも大切ですが、それだけではないですから。立ち憚る壁は大きいかもしれませんが、信念を持って、病院でも子どもを子どもらしく笑顔でいられるという原点を共有化していくことだと思います。

活動報告 HPSJ養成講座実習指導者 英国実習

2008年11月15日～23日

実習病院と実習指導者

Great Ormond Street Hospital（ロンドン市中心部）
Jenny Dyer氏 ―― 小島広江（聖隷浜松病院）
諏訪部和子（静岡県立こども病院）

Royal Hospital for Sick Children（エジンバラ市中心部）
Frances Barbour氏 ―― 田中久美子（あいち小児保健医療総合センター）
中山陽子（静岡県立こども病院）

Kingston Hospital（ロンドン市郊外）
Norma Jun Tai氏 ―― 小長谷秀子（静岡県立総合病院）

主な実習内容

HPS・医療者等の子どもや家族との関わりの観察、体験
プリパレーションやディストラクションなどの技法やノーマルプレイの観察、体験

学び直しという養成教育の観点からも、HPSをわが国に定着させるために求められる先駆的・実践的なスキルを身につけるという観点からも、非常に有意義で貴重な経験となり、本場英国のHPSの専門性やチームケアについて体験的に学習することができました。言語面では一部を除き大きなハードルでしたが、英語を苦手とする分、子どもやその家族に対し、HPSがどのように関わっているのか、医療チームの一員としてどのように行動しているのかなど、観察力を発揮し、自分なりの考察を深めてられました。また、そのようなハンディに対し、3名の実習指導者をはじめ、他のHPSや病院関係者等が丁寧に接し、熱心に指導して下さり、それに応えるように英国実習参加者も前向きに実習に取り組むことができました。「ノーマやフランシスが（本学の）講義で言っていたことがよくわかった」「やはり実際の現場を見ると全然違う」などの感想によく表現されています。

全体的な成果としてあげられることは、実習病院においてはハード面だけでなく、病院専門職が子ども主体の医療ケアを実践し、そのためにＨＰＳは不可欠であることや「Playこそは子どもの成長発達に欠かせない」という理念のもとに診療や治療がおこなわれている様子を体感できたことです。病院という場を特別な場所や領域という捉え方ではなく、Playが病院で展開されることが自然でした。HPSが子どもの意欲を引き出すというアプローチは当然ありますが、基本的に遊びたいことや気分を尊重し、何か遊ばせることを目的にするような力の入った関わりでありません。ごく自然に、病院内であっても、コーナー遊びで子どもが自由に遊んでいました。関わったHPSたちが言っていたのは、プレパレーションやディストラクションなどの技術よりもまずは子どもと普通に遊ぶことが大切であるということ。そして必ず、40年ほど前のイギリスも日本のように医療現場でPlayの価値が認識されておらず、HPSの活動を時間をかけて積み重ねた結果により医療スタッフや病院経営者などが変わっていくプロセスが大切であることを指摘していました。病院スタッフのホスピタリティあふれる関わりは、日本のHPSに対しての期待や励ましでもあり、この実習を機に参加者の視野がより広がり、各自の職場での役割や課題などが明確になったことが大きな成果です。

英国実習における各自の学びは様々であり、実習病院や指導者によっても内容等は異なっていましたが、その成果を単に自身の仕事に反映するだけではなく、それらを他の修了生やHPSに興味関心のある者などに公開し、わが国の小児医療におけるPlayの価値やHPSＪの認知度・技能を高めるためにリーダーシップを取っていくことが求められています。2009年1月24日に開催された英国実習の報告会でのディスカッションを含め、各自の学びを共有化し、よりHPSの専門性を高めていくための方法や手段を考え、志をともにするみんなで実践していくことが必要です。

HPSJ英国実習報告会